

胡適博士の論文

長 嶋 孝 行

禅宗史の研究に携さわる者として、歴史的には相当多くの
僧が真実を語っているのを見るが、明治以後では、松本文
三郎博士の著書『金剛經と六祖壇經』、そして「六祖壇經の
書誌学的研究」、鈴木大拙博士の一連の禅宗に関する著書、
宇井伯寿博士の『禅宗史研究』『第二禅宗史研究』等に代表
される。右記の大学者の外に、一風変わった曾て主観的哲学者
と言われた大学者、胡適博士の存在がある。禅宗史の研究は
ともすれば龐大な伝説資料にふりまわされ、伝説から歴史を
創造した学者、更には伝説の中で立ち往生した学者があつた
ようにも見受けられる。胡適博士にもそれらに類似した点が
ないわけではない。しかし、博士は常に伝説の中から真実を
導くべく、実証的研究者として、結論を断言する態度を固持
していた点は注目に値する、と考えるものである。従つて、
その業績の内から幾つかの論文を取り挙げ、更に、筆者の私
見と考察を加えて、吟味しようとするのが本論の主眼であ
る。

まず、第一は、胡適博士の著書、『神会和尚遺集』の中
の『南陽和上頓教解脱禅門直了性壇語』についてである。同書
は神会の南陽存在時代の初期に於ける僧俗への壇場説法の記
録であるといわれている。内容は後に『六祖壇經』の教義の
元本となつた幾つかの思想が認められる。

例一としては、如此坐者、仏即印可。六代祖師以心伝心、
離文字故。従上相承、亦復如是。（『神会和尚遺集』p. 232）で
あり、例二としては、知識、一切善惡、総莫思量。（同書p.
230）である。前者は仏即印可以下の文が、後者では『六祖
壇經』の僧俗に対する呼びかけとして使用されている、善知
識のお手本ともいふべき、知識という呼びかけであり、一切
善惡、総莫思量、という公案にもなっている有名な教義のお
手本である。勿論『六祖壇經』の中にも、その教義は含まれ
ている。

次に、同書は通称『壇語』といわれ、六祖惠能に関する
『壇經』のモデルとなつた題名であるに相違ない。神会の師

といわれる恵能に関する経典であるので、恵能を崇敬する意味に於いて『壇語』と経の字を使用したように考察される。即ち、敦煌本『六祖壇経』の標題は『南宗頓教最上乘摩訶般若波羅蜜経、六祖恵能大師於韶州大梵寺施法壇経一卷』であり、『壇語』のそれは『南陽和上頓教解脱禪門直了性壇語』である。右、棒線を付与した部分の類似に、後者が標題に於いて、お手本となったと考察される経緯を見るのである。右は『壇語』に關しては最初に胡適博士の学会への提示があったので、右のような私見を記した次第である。

ところで、右記『壇語』の題名に關するなら、胡適博士の『神会和尚遺集』の『壇語』の前書きに、

校写此卷時、我曾用日本鈴木貞太郎從国立北平圖書館藏的敦煌写本校写的「和上頓教解脱禪門直了性壇語」来此勘。

とあるように、南陽和上の南陽は欠除している。しかし、前書きのその後、巴黎出現的『壇語』的標題没有残余、正作「南陽和上」、即是在南陽時期的神会。とあるように、後世の資料、敦煌本『六祖壇経』と『円覚経大疏鈔』卷三之下、等を考察した結果、胡適博士の推論の一線上にあるために、南陽の二字の付加を決定したようである。即ち、それは神会の教義の思想は彼の南陽時代に既にあったとする主張に外ならない。しかし、ここでの推論の決定に問題がある。即ち、博士は後世の資料の上から結論したのであるが、国立

胡適博士の論文(長嶋)

北平(北京)図書館本には南陽との記載がないものを、何故に南陽と付記し、南陽和上と勇断したのか、という疑問である。筆者の私見としては、南陽の二文字が欠除されているなら、欠除されたままでよいではないか、という提案である。すると、『壇語』は南陽時代に於ける神会の作品ではないという問題が起るのである。つまり、筆者がすでに、「神会語録のお手本は頓悟入道要門論である」(『印度学仏教学研究』第二十六卷第二号 p. 834-836 参照)で証明したように、『壇語』は『頓悟入道要門論』以後に書かれてると仮定すると大變辻褄が合うのである。その例証としては『頓悟入道要門論』の冒頭と、『壇語』の冒頭の文が極めて内容に於いて類似するからである。即ち、『頓悟入道要門』論の文は、第一節に次のようである。

稽首和南十方諸仏、諸大菩薩衆。弟子今作此論、恐不会聖心。願賜懺悔。若会聖理、尽將廻施一切有情、願於來世、尽得成仏。

(Z. 1-2, 15, 5-420c)

(稽前して、十方の諸仏と、諸の大菩薩衆とに和南す。弟子今此論を作るに、聖心に会せざらむことを恐る。願くは懺悔を賜へ。若し聖理に会しなば、尽く將って一切の有情に廻施して、願はくは、來世に於て尽く成仏することを得む。)(『頓悟要門』岩波文庫本)

右、『頓悟要門論』の冒頭文は、神会の初期作品といわれ

ている『壇語』の冒頭に次のような形で参照され、記載されている。

知識、是凡夫口有無量惡言、心有無量惡念、久輪転生死、不得解脱。須一一自發菩提心。為知識懺悔、各各礼仏。敬礼過去尽過去際一切諸仏、敬礼未来尽未来際一切諸仏、敬礼現在尽現在際一切諸仏、敬礼尊法般若修多羅藏、敬礼諸大菩薩一切賢聖僧。各各至心懺悔、今知識三業清淨。過去未来及現在、身口意業四重罪、我今至心尽懺悔、願罪除滅永不起。次の訳は『初期禅宗史書の研究』による。(すべて凡夫は、口に無量の悪言を發し、心に無量の悪念を起して、長く生死に沈んで脱するを得ぬ。よろしくめいめに自から菩提心を起すべきである。わたしは諸君と共に懺悔しよう。もろともに礼拝されよ。「過去と過去を尽す一切の仏を敬礼したてまつる。未来と未来を尽す一切の仏を敬礼したてまつる。現在と現在を尽す一切の仏を敬礼したてまつる。いとも尊き般若の経藏を敬礼したてまつる。諸大菩薩と一切の賢聖僧を敬礼したてまつる。』今や、諸君は各自に至心に懺悔した。諸君の三業は清淨となつた。「過去と未来、及び現在の、身口意の三業の四つの重罪を、わたしは今至心に尽く懺悔する。願わくは、罪を除いて、とこしえに起きませんことを。……」)

宗教書は概して右のような懺悔文を冒頭に挙げる傾向にあるとはいへ、兩テキストは極めて類似している。即ち、兩書の共通する単語から見ると、『頓悟要門論』の文字、諸仏、大菩薩、懺悔、来世、聖理は『壇語』に於いて、一切諸仏、

大菩薩、懺悔、未来、一切賢聖僧となつているのである。更に、文章の内容は、『頓悟要門論』の「十方の諸仏と、諸の大菩薩衆とに和南す。」の文は、『壇語』の文の「よろしくめいめに自から菩提心を起すべきである。」に通じ、同じく、前者の「弟子今此論を作るに、聖心に会せざらむことを恐る。」の文は、後者の「すべて凡夫は、口に無量の悪言を發し、心に無量の悪念を起して、長く生死に沈んで脱するを得ぬ。」に相当する。また、前者の「願わくは懺悔を賜へ。」の文は、後者の「わたしは諸君と共に懺悔しよう、……諸大菩薩と一切の賢聖僧を敬礼したてまつる。」とインフレイトされて記載され、前者の末尾の「願わくは、来世に於て尽く成仏することを得む。」の文は、後者の同じく末尾の「願わくは、罪を除いて、とこしえに起きませんことを。……」に相通じるものがある。そして、兩テキストの文は、多少の前後こそあれ、最初から終りまで、殆ど同じ順序で記されていることは、別々に書かれて偶然に一致したとするには、あまりにもよくできすぎている、と考察される。

次に、胡適博士の『荷沢大師神会伝』の記述についてであるが、博士は滑台の無遮大会に触れて、次のような文を掲げている。

故に滑台の大会は、たしかに先声、人を奪ふものがあつて、大勝となつた。先声、人を奪ふは、先づ己れ攻勢を取り、人をして

守勢を取らざるを得ざらしむ。神会はこの時、もう六十七歳の老師である。我等は眉髮皓然たる老和尚が、この莊嚴道場上に在つて、獅子座に登り、大声疾呼、当時いかめしい勢力ある普寂大師を攻撃し、直ちに神秀門下を指して傍門とした大胆なる挑戦は、当時満坐の人をして信を生ぜしめたであろうと想像する。(今関天彭訳、『支那禅学の変遷』百十二、三頁)

右の棒線の部分のような表現が論文を書く体裁として許されるものか、聊か疑問である。更に、後に博士自ら訂正した同論文の次の記載についてである。

これは後世、禅宗唯一の經典たる六祖壇経が、彼の傑作であるからであつて、壇経の存在する一日は、即ち彼の思想勢力の存在する一日であるのである。壇経の最古本中に、「吾(慧能)滅度後、二十余年、——有_レ人出来、不_レ惜_二身命、第_三弘教是非、豎_二立宗旨、——と云ふ予言があるが、是れ即ちこの経を神会か、若くは神会一派が作った証拠である。神会が開元二十二年、滑台にて宗旨を定めたのは、正に慧能の死後二十一年に当るから、是れは最も明かなる証拠ではないか。壇経の古本中に、懷讓、行思の事はなくして、神会の得道を提出し、「余者不_レ得、」とあるのも、また是れ明かなる証拠ではないか。此の外、更に疑うべき証拠がある。それは草処厚の書いた大義禅師の碑銘に、「秦者曰_レ秀、以_二方便顕、普寂其胤也、洛者曰_レ会、得_二総持之印、独曜_二瑩珠、習徒迷_レ真、橘栢変_レ体、竟成_二壇経伝宗、優劣詳矣、——とある。大義は道一の門下で、八一八年に死したが、その時は、神会は死し

て、已に五十八年となつた。かく草処厚は、明かに壇経が神会門下の習徒が作ったと云つて居る。但し伝宗とは、顕宗記を指すものなるや否やを知らぬ。見られよ壇経が神会一派に出てたのは、当時に在つて、世人の知つて居る事である。さりながら、結局壇経は神会本人の作であるかどうかと云ふに、壇経の重要部分には、神会が自ら作ったものである。だが一步を譲つて、神会の作でなくして、彼の弟子か彼の語録から材料を取つたとするも、前説の如く、神会自身の作と云ふ事が情理に近い。それは壇経中には、誠に精到なる部分があつて、決して門下の小師の能く作るものではないからである。自分は壇経の主要部分を、神会が自ら作ったものと信ずるのは、完全に考証学の内証に根拠するからである。即ち壇経の重要部分が、新発見の神会語録と完全に同一のものであるからである——内容の同一なるのみならず、文章も同一なるからである。(前掲書)

筆者はこれら博士の仮説と証明と勇断、そして、その訂正に最大級の賛辞を送るものである。

(国立国会図書館主査・Pa. D)